

## ご神木と古代出雲の風景

大 嶋 辰 也

### 1. はじめに

平成 26 年度の活動テーマは、**荒神・ご神木**である。古代出雲の中心地である意宇川流域、ご神木に関する情報が豊富な邑智郡を対象として、荒神・ご神木の樹種と、地域の自然環境等との新たな関係性を見出すことにより、地域資源としての魅力発見・向上につなげることを期待した。また、八雲立つ風土記の丘資料館に展示されている“奈良時代復元模型”に触発され、当時の景観復元（想像）を試みた。

### 2. 平成 26 年度の活動概要

平成 26 年度は、ご神木をテーマとした現地視察を行うとともに、山王寺自然観察会の講師を行った。表-1 に本年度の活動スケジュールを示す。

表-1 平成 26 年度の活動概要

月日	内容	備考
4/5	第 1 回ミーティング	・平成 26 年度の活動方針を確認した。
6/21	第 2 回ミーティング (現地下見)	・東出雲の 4 箇所を現地踏査し、平成 26 年度の調査方針を確認した。
7/19	山王寺自然観察会の 下見	・7/26 の自然観察会について、山王寺の方との打合せ及び現地下見を行った。
7/26	山王寺自然観察会	・自然観察会（山王寺棚田調べ）の講師をした（講師として 4 名参加）。
10/11	現地視察	・意宇川流域の 8 箇所を現地踏査した。また、八雲立つ風土記の丘資料館を見学した。
12/13	第 3 回ミーティング	・現地視察等の活動を報告した。

### 3. 山王寺の自然観察会

「日本の棚田百選」に選定された雲南市山王寺地区において、山王寺本郷棚田実行委員会から「田んぼの学校（自然調べコース）」の講師依頼を受けた。平成 24 年度からの取り組みであり、平成 26 年度は講師として会員 4 名（田中、森脇、片岡、大嶋）が参加した。

自然観察の場は、これまでと同様、田んぼとため池であるが、今年は、子供たちに見つけた生き物の絵を描いてもらい、それを見つけた環境を地図に張り付けてもらった。それから、子供たちに見つけた時の細かい話を聞きながら、その生き物と生息環境について説明した。今後も、子供たちの“目”を大切に、自然観察会の企画を考えて行きたいと考えている。



#### 4. 意宇川流域を中心とした荒神・ご神木

##### 4.1. 概要

古代出雲の中心地である意宇川流域を中心として、計 11 箇所の神社等を対象に現地を踏査し、ご神木等の樹種や周辺環境を確認した。

##### 4.2. 現地踏査日及び踏査箇所

現地踏査日を表-2 に、現地踏査箇所を図-1 に示す。

表-2 現地踏査日及び踏査箇所

現地踏査日	内容	踏査箇所（図-1 参照）
6 月 21 日	下見（4 箇所）	阿太加夜神社、揖屋神社、意宇の杜、山代町荒神
10 月 11 日	視察（8 箇所）	熊野大社、磐坂神社、志多備神社、毛社神社、六所神社、意宇の杜、真名井神社、山代神社

注) 意宇の杜は、2 日間とも視察した。

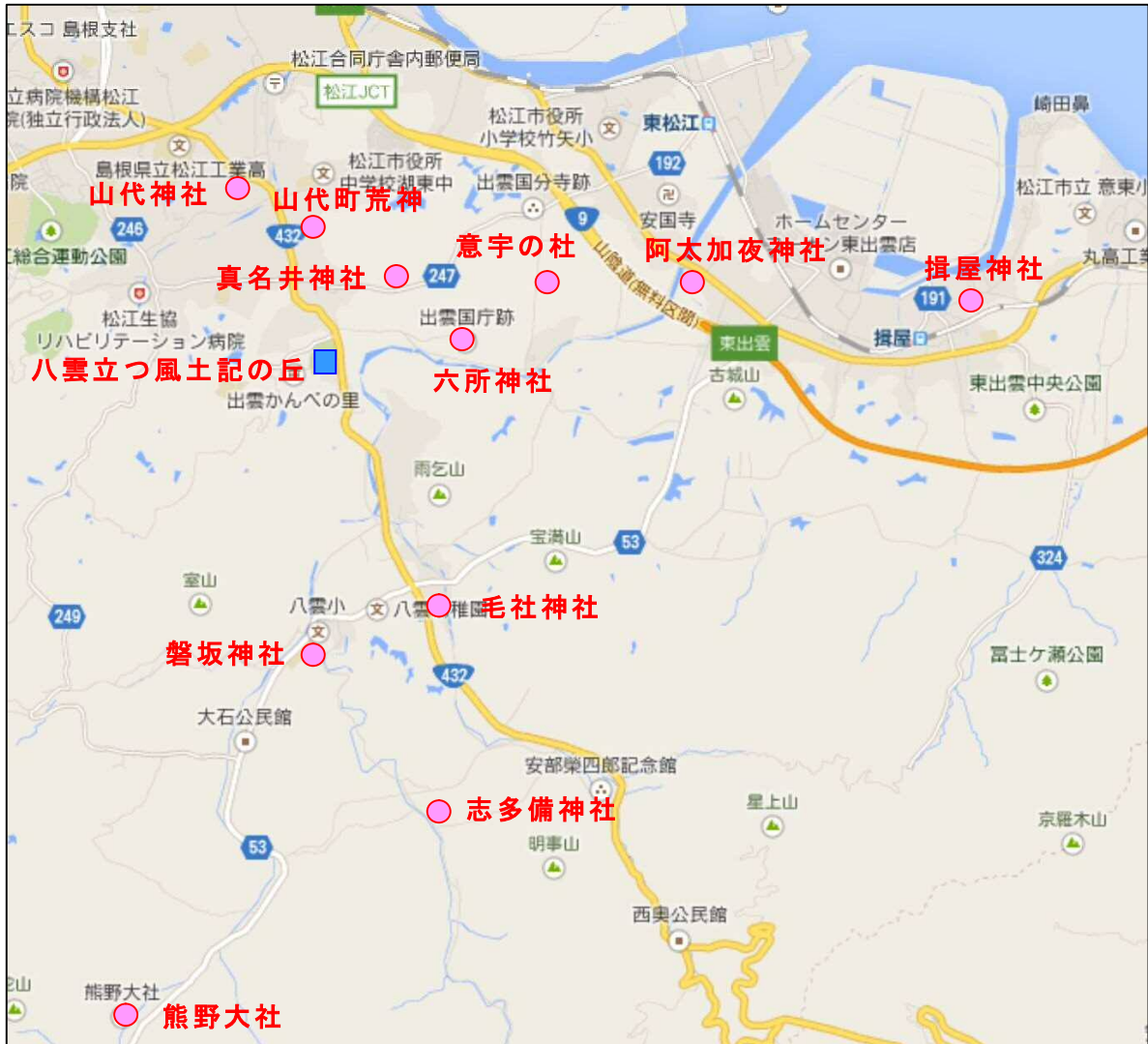


図-1 現地踏査箇所

#### 4.3. 意宇川流域で確認されたご神木等

現地で確認した主なご神木は、タブノキ、スダジイ、スギの大木である。その他のご神木として、エノキ、ネズミモチ、サワラ、ヤブツバキ、モチノキ、カツラも確認された。このうち、志多備神社のスダジイは、日本一のスダジイとして有名である（最近、他県で日本一の木が見つかったらしい）。また、ご神木ではないが、珍しい種としてチシャノキ、ナギがあげられる。その他、磐坂神社、志多備神社の社寺林は、特定植物群落（環境省）に選定され、山代神社を取り囲む樹林は緑地保全区域（松江市）に指定されている。

表-3 現地踏査で確認したご神木等

神社名	ご神木等	備考（地形、その他）
阿太加夜神社	・タブノキ（2本） 〔荒神〕	・神社は砂礫堆上に位置する。 ・その他、境内にはスダジイ、ヤブツバキ、サワラ、ムクノキ、エノキがみられた。
揖屋神社	・エノキ、ネズミモチ、スダジイ、サワラ〔荒神〕	・神社は丘陵地に位置する。 ・境内脇に荒神が祀られている。近隣の荒神を最近合祀したためか、いずれも樹高が2～数mと低い。
意宇の杜	・タブノキ	・神社は扇状地に位置する。周囲の水田より1段高い立地にある。タブノキの樹高は低いが、横方向に広がる。他にサクラ類が目立つ。
山代町荒神	・スダジイ	・荒神は砂礫台地上に位置する。 ・荒神が祀られているスダジイの大木に接してタブノキの大木もみられる。住宅地内に突如現れる。
熊野大社	・モチノキ、スダジイ、サワラ、カツラ〔荒神〕	・神社は砂礫台地上に位置する。 ・その他、境内には縁結びの榊、連理の榊がある。 ・神社の背面にはスダジイやスギなどの巨木あり。
磐坂神社	・ご神木らしい木は確認できず。	・スダジイ林内への竹の侵入がみられた。今後の拡大が懸念される。 ・社寺林は特定植物群落（八雲磐坂神社照葉樹林）。
志多備神社	・スダジイ	・日本一のスダジイ ・社寺林は特定植物群落（八雲志多備神社照葉樹林）
毛社（もこそ）神社	・ヤブツバキ	・神社は砂礫堆上に位置する。 ・その他、境内にはサカキ、タブノキ、スギ、サワラがみられた。
六所神社	・タブノキ ・スギ（2本） ・？（落葉広葉樹） 〔荒神〕	・神社は砂礫堆上に位置する。 ・左記の荒神さんは、境内の西側にある。 ・その他、参道にはタブノキ、境内にはスダジイ、チシャノキがみられた。
真名井神社	・ご神木らしい木は確認できず。	・神社は茶臼山の南側斜面に位置する。 ・境内にはイヌマキ、ケヤキが本殿を挟んで左右対称に配置されていた。 ・社寺林は特定植物群落（真名井の照葉樹林）。
山代神社	・不明	・神社は砂礫台地及び丘陵地上に位置する。 ・その他、ナギ、スギなどがみられた。 ・神社周辺の樹林は、「緑地保全区域」（松江市）に指定されているが、竹の侵入あり。

〔現地踏査で確認したご神木など〕

		
阿太加夜神社のタブノキ	阿太加夜神社の荒神	意宇の社のタブノキほか
		
揖屋神社の荒神	山代町荒神	熊野大社の荒神
		
八雲磐坂神社照葉樹林	磐坂神社のスダジイ	毛社神社のご神木
		
志多備神社のスダジイ	志多備神社のスダジイ	六所神社の荒神
		
六所神社のチシャノキ	真名井神社の参道	真名井神社のイヌマキ

## 5. 邑智郡のご神木（大元神社に係る資料より）

### 5.1. 資料の概要

大元神社は、県西部に数多く分布する。そのうち、邑智郡の大元神社については、「島根県邑智郡 大元の神々ー大元神鎮座地調査報告書ー」（平成6年、島根県邑智郡大元神楽伝承保存会）で詳細に調査されている。この資料から、ご神木に関する情報を抜き出し、樹種等の特徴を整理した。

### 5.2. 邑智郡にある大元神社のご神木

ご神木の樹種は、常緑針葉樹5種、常緑広葉樹7種、落葉広葉樹8種と、予想以上にバラエティーに富んでいた（表-4参照）。これに、樹種が不明な種、記載のない箇所を含めると、もっと多様であった可能性がある。ご神木の樹種は、照葉樹林帯要素の種（スダジイ、タブノキ、カシノキ、ヤブツバキ、サカキ等）が多くを占めており（タブノキが最も多い）、県東部に多いスギは7件と、以外に少なかった。その他、件数は少ないものの、地域の環境等を反映していそうなご神木の樹種について以下に記す。

- ・ムクノキ、エノキは、沖積低地（河岸段丘、自然堤防等）の潜在自然植生（ムクノキーエノキ群集）構成種である。ムクノキ（1件）の立地は、谷底平野の平地部に位置する。エノキは昭和19年の台風で倒木したようであるが、元々は谷底平野の平地部にあったようである。
- ・ケヤキ、チャボガヤは、山地溪谷林（溪谷、崖錐地）の潜在自然植生（チャボガヤーケヤキ群集等）構成種であるが、現地でも谷沿いに位置する。

表-4 資料中に記載されているご神木の樹種

種名	旧羽須美村	旧大和村	旧邑智町	川本町	旧瑞穂町	旧石見町	旧桜江町	合計	
針葉樹	モミ	1						1	
	スギ			1		2	2	7	
	ヒノキ					1	1	2	4
	チャボガヤ						1	2	3
	アカマツ						1		1
常緑広葉樹	スダジイ						3	3	
	タブノキ			4	4		11	19	
	カシノキ		2				1	4	7
	モチノキ					1			1
	ヤブツバキ	1	1			1	2	1	6
	カゴノキ						1		1
	サカキ						2	1	3
落葉広葉樹	アベマキ						1		1
	エノキ						1		1
	ケヤキ						1		1
	ムクノキ						1		1
	ホオノキ		2						2
	トチノキ					2			2
	ハゼノキ			1					1
シダレザクラ						1		1	
なし				1			1	2	
不明	2		1	3	6	2	3	17	
記載なし	2	1	2	7	8	10	14	44	
合計	6	6	9	15	21	26	46	129	

注) 本数は、過去に伐採、倒木したご神木も含んでいる。

- ・トチノキは、山地溪畔林の潜在自然植生（ジュウモンジシダートチノキ群集）構成種であるが、現地でも、谷底平野と山地の境付近に位置する。
- ・アベマキ、ハゼノキは、二次林に生育する種である。アベマキのある神社は、元々スギがご神木であったが、戦後、配線工事の関係で伐採し、すぐにアベマキを植えたらしい。島根県西部～広島県では、第二次大戦の頃を中心にアベマキがコルクの代用品として栽培されていたようであり、そのような社会的な背景が関係するかもしれない。あるいは、アベマキの根が直根性で土を保持する能力が高いとされるので、防災上の願いを込めての選定かもしれない。
- ・ハゼノキについては、このご神木のある山には元々ハゼノキが多く、ローソクの原料にするための採取が行われていたが、採取のためにご神木に登ろうとすると、必ず落ちるといわれていたようである。
- ・道路工事、圃場整備等で伐採された箇所が6箇所あり、自然に枯死・倒木した個体も多くある。ご神木は意外と簡単に変更されたようである。

## 6. ご神木の樹種とその特徴

意宇川流域の現地踏査、邑智郡のご神木に関する資料調査により、ご神木の樹種選定について考察した。以下にその概要を記す。

### 6.1. 立地環境を反映した高木性の樹種

意宇川流域のご神木は、タブノキ、スダジイが大部分を占めたが、邑智郡では、針葉樹、広葉樹（常緑・落葉）の計20種が確認された。邑智郡のご神木をみると、山地・丘陵のタブノキ、スダジイ、沖積低地のムクノキ、エノキ、溪谷のケヤキ、チャボガヤ、溪畔のトチノキなど、立地環境を特徴づける高木性の樹種がご神木として選定されており、実際、ご神木の立地は、樹種本来の生育環境と同様の環境を有していると考えられた（資料には神社やご神木の位置が示されている）。意宇川流域でご神木の樹種が少なかったのは、神社の位置する地形が丘陵地・山地・砂礫堆と、潜在自然植生がタブノキ林やスダジイ林になる環境だったからと考えることができる。もう少し広域で調査すると、邑智郡のような多様性が確認されるかもしれない。

### 6.2. 信仰と直接関係する樹木

例えば、「たたらー金屋子神ーカツラ」のように、信仰と密接に関わる樹種がある。島根県東部では、ご神木としてスギが多くみられる。ヤマタノオロチ伝説で「その身体は日陰かずらやヒノキや杉が生えていて（現代語訳）」、「ヤマタノオロチを退治した後、その八つの頭を埋め、八本の杉を植えた」との記述があり、古くからスギやヒノキは重要な場面で登場することから、何らかの信仰と関わり合っている可能性がある。既に誰かによって研究され

ているテーマと考えられるので、諸説ご存じの方は教えていただきたい。

### 6.3. 祟りなど、何かいわれのある樹木

邑智郡のハゼノキのように、「ご神木（になる前の木）を登った人は必ず落ちる」ということから、祀られた樹木もあるようである。その他、危険箇所への侵入防止などが起源のご神木もあるかもしれない。

### 6.4. その他

揖屋神社では最近合祀された荒神のご神木がある。中低木のネズミモチなど、ご神木のイメージとは異なる樹木もある。揖屋神社の場合は、樹種よりも場所が重要であり、その場所で、ご神木になりそうな木を選ばれたのかもしれない。これは現在の話なので、今後聞き取りなどで確認していきたい。

## 7. 意宇川下流域における奈良時代の景観復元に向けて

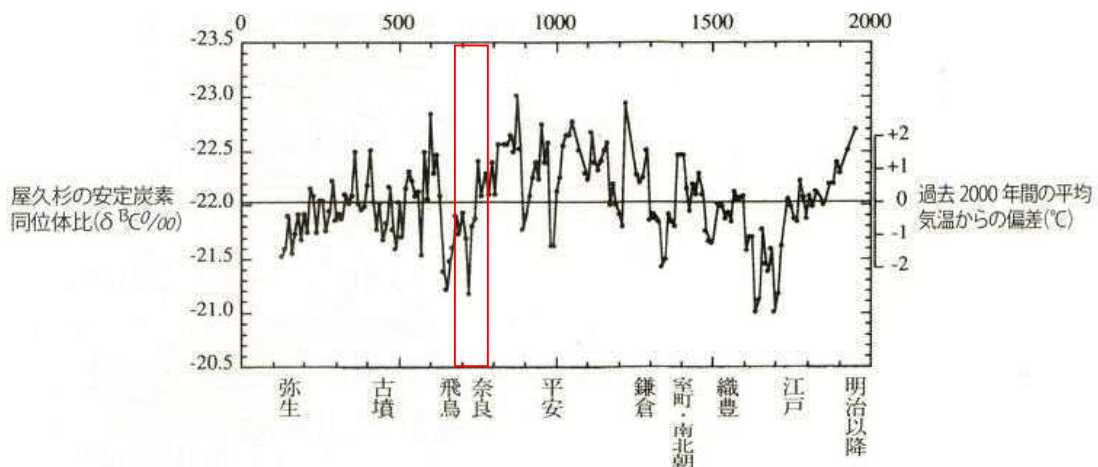
### 7.1. 経緯

八雲立つ風土記の丘資料館には、奈良時代の出雲国府を中心とした諸施設、街道などの大型復元模型が展示されている。長時間見ても飽きないが、茶臼山以外の森林が現在と変わらないことが気になった。職員さんに聞くと、出雲国風土記に当時の植生に関する記述（東に松あり、他3方は茅）のある茶臼山以外の明確な情報がないことから、現在の姿を展示しているとのことであった。「当時の姿を復元したい!」ということで、出雲国風土記を含めて、当時の植生が推定できそうな情報を探った。

### 7.2. 当時の気温の再現

気温は、植生の分布を規定する重要な要素の一つである。そこで、出雲国風土記の時代(西暦700年前後)の気温について、文献を調べた(図-2参照)。

当時の平均気温は、現代(1990年代)より1度以上低いと考えられる。これは標高差200m程度(-0.6°C/100m)に相当する。



〔吉野正敏ほか編「講座・文明と環境」第6巻 p50より〕

図-2 過去の推定気温（屋久島）

### 7.3. 当時の人口

松江市観光案内のHPによると、「当時の出雲地方には約70の郷があり、一郷50戸（一戸は家族集団）で、一戸平均25名として、総人口は約8～9万くらい」との情報があげられている。この想定人口から、必要な薪炭等を概算し、人の手が入った林野の面積を想定できるかもしれない。

奈良時代の総人口が500～600万人で、首都奈良の人口が20万人程度とのことであることから、出雲地方の人口は全国でも多いものと考えられる（現在の地域人口は約50万）。なお、明治9年の松江市の人口は33,381名と、都市人口の全国第23位であり、太平洋地域を中心とした近代化の前は、日本有数の都市であったとのこと（図-3参照）。

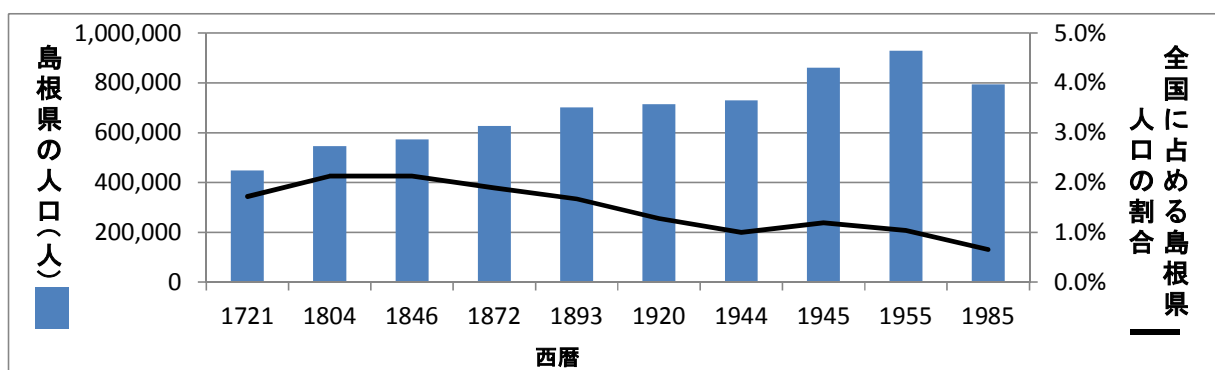


図-3 島根県における人口の推移（江戸時代以降）

### 7.4. 出雲国風土記（西暦733年完成）の記載内容

出雲国風土記の解釈は、植物を含めて既に多くの文献で検討しつくされた感はあるが、ここでは、あえて私なりの解釈・考察を加えてみた。

#### ■意宇郡・七・山野

神名槌野（茶臼山）：東に松有り。三つの方は並びに茅有り。

※「野」→樹木の少ない山、山裾の傾斜地の意味。

八雲立つ風土記の丘資料館の復元模型では、この記述に基づいて南・北・西方向の斜面を草地としている（茅の草地っぽくはない）が、東の松については採用されず、現在の植生で表現されている。

茅は、古くから屋根材や飼肥料などに利用されてきた草本の総称である。既往文献では、茅はチガヤと記されているが、草刈草地の一般的な優占種はススキであることが多い。チガヤは年2回程度の草刈を行う畦畔に多いことから、茶臼山の茅は、ススキ草地であった可能性が高いと考えられる。

松は、現在の植生からみてアカマツと考えられる。アカマツ林は、痩せ尾根の土地的極相として分布するほか、薪炭林の姿としても存在する。現在の茶臼山の斜面に痩せ尾根的な環境はみられないことから、当時から薪炭林として利用されていた可能性がある。



したがって、奈良時代の茶臼山は、東向き斜面では薪炭林として利用されているアカマツ林が、それ以外の斜面ではススキ草地が成立する景観とし捉えてはどうかと考える。

■ 凡て、諸々の山野に在る所の草木は、麦門冬（ジャノヒゲ）、独活（ウド）、石斛（セッコク）、前胡（ノダケ）、高粱薑（クマタケラン）、連翹（トモエソウ）、黄精（ナルコユリ）、百部根（ビヤクブ）、貫衆（ヤブソテツ）、白朮（オケラ）、薯蓣（ヤマイモ）、苦参（クララ）、細辛（ウスバサイシン）、商陸（ヤマゴボウ）、藁本（カサモチ）、玄参（ゴマノハグサ）、五味子（サネカズラ）、黄芩（コガネバナ）、葛根（クズ）、牡丹（ボタン）、藍漆（タデアイ）、薇（ワラビ）、藤（フジ）、李（スモモ）、檜（ヒノキ）、杉（スギ）、赤桐（アブラギリ）、白桐（キリ）、楠（クスノキ）、椎（シイ）、海榴（ツバキ）、楊梅（ヤマモモ）、松（マツ）、榎（カヤ）、薬（キハダ）、槻（ツキ） [計 36 種]

上記には薬草が多く含まれ、日本にはない植物も含まれている。そこで、日本に自生する種を抽出し、生育環境毎に表-5 に整理した。

なお、以下の植物については、文献に記された以外の種の可能性もある。

- ・ 楠… 本来は中国のタブノキを示す字であり、ここでもタブノキを示す可能性はある。クスノキは暖地性の樹種であり、島根県が本来の自生地か疑問である（特に、奈良時代は現代より寒冷な気候である）。
- ・ 貫衆… 文献ではヤブソテツと記されているが、一般にはゼンマイ科やオシダ科を示すものであり、ゼンマイを示す可能性もある。
- ・ 槻… 室町以前に用いられたケヤキの古名である。

表-5 出雲国風土記に記載された植物から想定される当時の環境

環境	概要
照葉樹林などの樹林に生育する種	・ タブノキ、シイ（スタジイ？）は、自然植生の優占種になる種である。また、ヤブツバキ、ジャノヒゲ、サネカズラは、照葉樹林の林内に広く分布する。逆に、二次林に出てくる種は、アカマツくらいしか見あたらない。茶臼山の斜面や瘠せ尾根、小規模な薪炭林、植林以外は、山地・丘陵の広い範囲が照葉樹林で覆われていた可能性がある。
二次林	・ アカマツは、土壌条件が悪い土地的極相林と、薪炭林等の伐採により成立する場合がある。現在の茶臼山で土壌条件の悪さを感じないので、伐採により成立したものと考えられる。必要な薪炭が得られる最低限の範囲で成立していた可能性がある。
明るい草地、林縁部	・ オケラ、ワラビ、ゼンマイは、明るい草地に生育する種である。また、クズは、林縁部などに生育する。集落付近では里山的な利用がなされていた可能性がある。
沢・溪流	・ 沢・溪流性のキハダ、スギ、ケヤキ、チャボガヤなどは、山地・丘陵の谷沿いで、小規模に点在していた可能性がある。
平野部	・ 資料館の復元模型はよくできている。新たな発想はない。

## 7. 5. 松江市近郊の遺跡調査での花粉分析に関する資料等

過去の植生を想定する方法として花粉分析がある。松江市近郊で行われた幾つかの花粉分析結果について、その概要を表-6に整理した。

表-6 松江市近郊で行われた花粉分析結果の概要

文献名	記載内容
松江市西川津町_タテチョウ遺跡の花粉分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>・縄文時代後半：カシ類、シイ類などの常緑広葉樹にコナラ類、ニレ科などの落葉広葉樹をまじえる暖温帯林。</li> <li>・弥生時代～古墳時代中期：低地にはスギ林が広がる。</li> <li>・古墳時代中頃～西暦 1500 年頃：低地は水田、山地はカシ類を主とする暖温帯林。</li> <li>・西暦 1500 年頃以降：アカマツ林を主としコナラ林を伴う二次林。</li> </ul>
中海宍道湖より得られた柱状試料の花粉分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>・弥生時代前期の始めからおよそ AD800 年（平安時代始め）以前：中海周辺の植生は、山地にはカシ、シイなどを中心とする照葉樹林が広がり、山間の低地にはスギが生育したと考えられる。また、低湿地では稲やソバの栽培が行われていたと考えられる。</li> </ul>
島根県松江市山津遺跡における花粉分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>・8～9 世紀：調査地点周辺で水田が存在したと考えられる。周辺の山々はカシ類を主要素とする照葉樹林に覆われていたと考えられるが、谷斜面にはスギの分布が推定される。また、一部の山ではアカマツ類やコナラ類を要素とする薪炭林が分布していた可能性もある。</li> </ul>
島根大学構内遺跡第 1 次発掘調査における花粉分析	<ul style="list-style-type: none"> <li>・奈良時代以降：島大遺跡周辺の丘陵にはアカガシ亜属を要素とする照葉樹林が分布し、谷奥などにはスギの湿地林が分布していたと考えられる。</li> </ul>

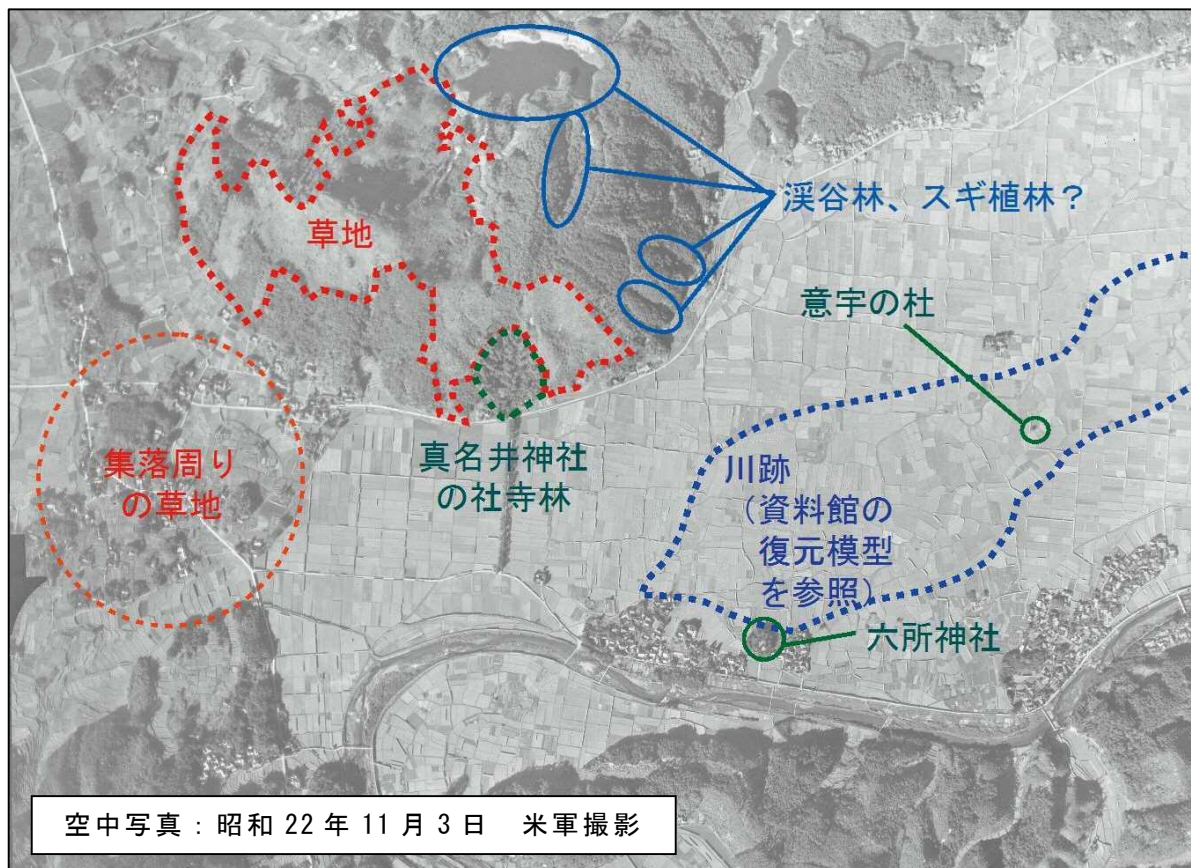
## 7. 6. 奈良時代における意宇川流域の景観復元（想像）

八雲立つ風土記の丘資料館に展示されている“奈良時代の復元模型”のうち、出雲国風土記に明記されている茶臼山の山地・丘陵部については、情報がないとの理由で現在の姿で復元されていることは前項で述べた。検討する時間がなかったかもしれないが、少々、正確でなくても、様々な分野の点情報をつなぎ合わせ、“想像の翼”を拡げて復元を試みてもよかったのではないか。それが、次のステップにつながる気がする。平地部の表現が豊かな分、山地・丘陵の表現の乏しさが、個人的には残念でならない。今後の復元の見直しを期待しつつ、以下に私なりの解釈を加えてみた（図-4 参照）。実際には、当時の集落の位置や人口等を勘案し、より裏付けのある復元が必要であることは認識しているので、内容が不十分な点をご容赦願いたい。

- ・松江市近郊で行われた花粉分析結果より、奈良時代の植生は、カシ、シイなどを中心とする照葉樹林が丘陵部に広がり、山間の低地にはスギが生育していたことがうかがえる。アカマツやコナラなどが優占する里山（薪炭

林)が広がるのは、西暦1500年以降のようである。

- ・出雲国風土記には里地(草地や林縁部)に生育する種が記載されていることから、家の周りでは草刈などが行われていたと考えられる。奈良時代でも、里山(薪炭林)はあったようであるが、どの程度の広さで分布していたのかはわからない。しかし、労働力が人力に限られる当時では、必要以上(ムダ)の伐採はしないと考えられるので、当時の集落の位置(埋蔵文化財等で把握可能?)、人口(郷・戸(家族集団)の数?)等と関連づけて、里山林の位置や面積を検討することは可能かもしれない。また、燃料・肥料革命以前(昭和30年代以前)の空中写真等から、斜面部の人の活用の仕方を想像できるかもしれない(人力は時代で変わるものではない)。図-4の空中写真をみると、茶臼山の3方が草地となっている。現代(戦後)も出雲国風土記の時代も、基本的にはあまり変わらないかもしれない。
- ・ヤマタノオロチについて「背にはスギとヒノキが生え」などの記述があり、昔から植林が行われていたことがうかがえる。また、スギは低地や谷沿いで自然植生として分布した可能性もある。低地や谷沿いには、沢・溪流性のスギ、キハダ、ケヤキなど樹林が小面積で点在していたのかもしれない。



注) 図中の情報は、検討のイメージとして表現したものである。詳細に検討すると、全く別の結果になると考えられる。

図-4 戦後の空中写真から奈良時代の景観を想像する

## 8. おわりに

生物多様性サービスという言葉をご存じだろうか。生態系によって提供される資源、それから得られる利益を意味し、供給（食品、原材料など）、調整（気候、洪水など）、文化（精神的・文化的利益）、基盤（栄養循環、水や大気の浄化など）、保全（多様性の維持など）の種類に区分される。

平成 26 年度は、荒神・ご神木をテーマに活動し、人と自然との関わり（特に、文化面での生態系サービス）について再認識することができた。技術が進歩すればするほど、これら生態系サービスは見えにくくなっている（なくなる訳ではない）。見えにくくしている張本人の一人が技術者であろうし、見えやすくする責務を担っていくのがこれからの技術者かもしれない。

生物多様性研究分科会の研究について、専門的な方向に進むのか、人との関わりを重視した方向に進むのか迷っていたが、3 年たって、後者に軸足を置くべきと思うようになってきた。生物多様性とは、自然を守るのではなく、人間の生活を守るために出てきた言葉だと思うからである。

最後に、邑智郡の資料に記された言葉を以下に示す。丹念に調べることの重要性を感じた。分科会活動でも、小さな点情報を丹念に集めて、線・面的に拡げていくことも、重要な地域貢献であると感じた。今後も、そのような観点も含めてテーマを考え、活動を続けて行きたいと考えている。

平成は新しい時代である。生活は大きく変わったが、文化を継承することは大切なテーマであることを訴えたい。鎮座地が消えた。集落そのものが消えた場合が各所にある。そのような地名は、古い土地台帳をめくればいくらかでも出てくる。今回、こんなことを丹念に調べて下さった方もあった。開発のため、気付いた時にはなくなっていた、こんな例も聞いた。その地に息吹が残っていた場合の例としては、危うく場所を移動して今に残した、新しい神木を植えたなどの例のほか、明治期における合祀前の状態に戻した、などの事例が聞かれたことはほほえましい限りであった。自然を大切に、先祖伝来のものを後の世代に受け継いでいきたいものである。

〔「島根県邑智郡 大元の神々―大元神鎮座地調査報告書―」より抜粋〕

## <参考文献>

- ・講座文明と環境（第 6 巻新装版）歴史と気候（平成 20 年、吉野正敏ほか編）
- ・出雲国風土記（全訳注）（平成 11 年、萩原千鶴著）
- ・解説 出雲国風土記（平成 26 年、島根県古代文化センター編）
- ・島根県邑智郡 大元の神々―大元神鎮座地調査報告書―（平成 6 年、島根県邑智郡大元神楽伝承保存会）
- ・島根県松江市山津遺跡における花粉分析（平成 18 年、渡辺正巳）
- ・島根大学構内遺跡第 1 次発掘調査における花粉分析（平成 9 年、渡辺正巳ほか）
- ・中海宍道湖より得られた柱状試料の花粉分析（昭和 63 年、渡辺正巳ほか）
- ・松江市西川津町\_タテチョウ遺跡の花粉分析（昭和 62 年、大西郁夫・渡辺正巳）